

福島原発事故の教訓

坪井 主税

東北三陸地方には「津波でんでんこ」という言い伝えがある。「津波が来たら、親も子もない。てんでんバラバラに逃げて、まずは自分の命の安全を確保しろ。そして、一家全滅、共倒れを防げ」。この言い伝えには、先

人の二つの教えが含まれている。一つは、運良く生き残った人間は不幸にして奪われてしまった命の分まで頑張つてふるさとを再生しろ、という教え。二つは、津波はいつ、どこで、どんな規模で起きるか分からない自然の脅威で、到底人間が抗しきれぬものではない、という教え。福島原発事故は、原子力工学が自然の脅威に抗しきれると過信した人間のおごりが引き起こした事故である。

運良く生き残った東北人はいま、悲しみをこらえ、耐え難きに耐え、日本中・世界中からの励ましのエールと協力を背に、がれきと廃墟のなかで、絶望を希望に変えるふるさと再生の営みを始めている。

その障害になっているのが、ポロポロになった福島原発から漏れ出している放射能だ。自然の大气の流れはすでに、原発に隣接している双葉町、大熊町、楢葉町、富岡町の家、道、畑に放射能を運んだ。そこにはもう防護服なしには入れない。周辺の飯館村、南相馬市の

一部なども同じだ。ここでは子供は校庭で遊べない。非情な大气は、原発から遙か二〇〇キロも離れた千葉県原市の牧草の上にも放射能を運んだ。そこでは、牛は外で草をはめない。

海に流された大量の放射能は、自然の海流に乗って、すでに茨城や千葉の近海に広げられた。そこで獲られた小魚は食べられない。一、二年すると、アメリカの太平洋岸まで行ってしまうかもしれない。自然の大气と海流は、一体どこまで放射能を運ぶのか。

東北の再生にばかりではない。放射能は外国人にも恐怖を与え迷惑をかけている。せめて、これ以上放射能が漏れ出さない状態にしなければならぬ。その筋の専門家は「放射性物質の放出を止め、安定した状態に持ち込むには、原子炉を「冷温停止」状態にする必要がある。それには少なくとも数カ月かかる」と言う。門外漢なので、この難しい説明はよく分からないけれど、要は、まだ数カ月間は放射能は出つばなしになる、ということだろう。という事は、原発に隣接している町々、そして周辺の町々は、ひよっとすると、チェルノブイリ事故後の「立ち入り禁止区域」のように、日本であつて日本でない、ただ荒れ

果てた、人の住めない土地になつてしまつてはないか。そんなことになつたら、それぞれの町が築き上げてきた歴史、文化、伝統はどうなるのだ。

われわれはもう、原発の是非を「立地地域の雇用が促進される」「立地地域に交付金が下りる」から論じることは止めよう。事故現場から遠くに住み、自分には被害がおよばないと思つている人の「今の便利な生活を維持するために原発は必要」というエゴイステックな主張も止めよう。次にどこかで事故が起これば、自然の大气は放射能をその人の頭上に運んでくるのだから。

われわれの生活に必要な電気は、発電施設が自然の脅威で破壊されても、放射能を出さないものから得ようではないか。自然は時に非情で、このたびのような大津波を発生させるけれど、常時は、われわれが電気を調達できる恵みを与えてくれている。太陽の光、風水、波、潮の流れ。これらの恵みを利用して電気を作ることには可能だし、その一部はすでに実行されている。これから少し時間はかかるだろうが、われわれ日本人は、自然エネルギー派にならうではないか。

願わくば、いま疎開している隣接・周辺の町の人たちが、何年かしたら、それぞれのふるさとに戻り、他の東北の人たちと同じように、ふるさと再生のために頑張ることができますように。

八つばい ちから・札幌学院大学名誉教授（平和学）